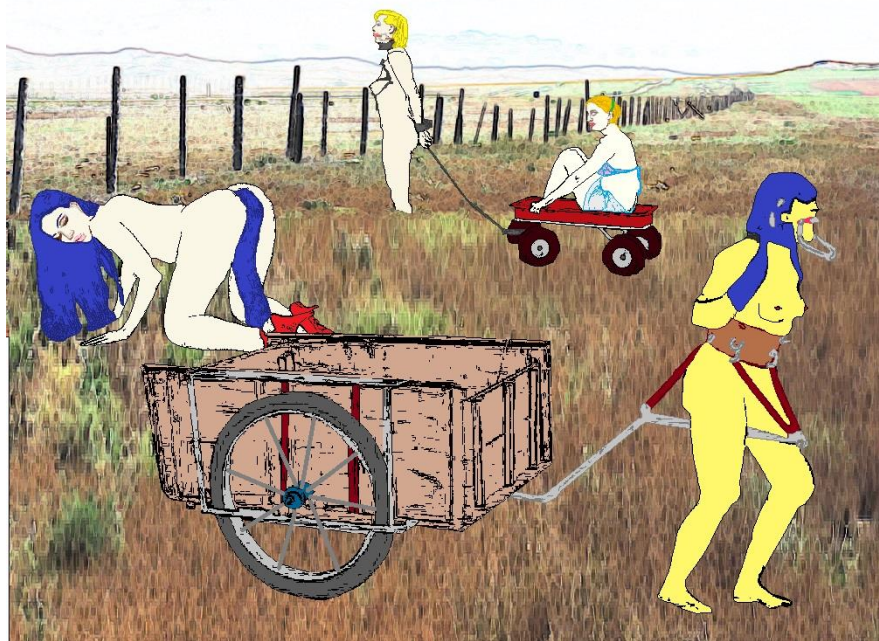


SMツアー：貴女の妄想叶えます

## 第2話：ドンキーガール



濠門長恭

## 登場人物

高山昭雄（45）

Splendid Marvelouse Tours 社長。

真性マゾ女性のための裏ツアーを手掛けている。

木島菜穂子 [ドンキーアッス]（38）

[アナルステップ]

ご主人様の出張中を預けられた。オーナー専属の牝馬。

[バレンプッシー]

無精子症の夫に、繁殖目的で入厩させられた。

[プアブーブス]

最年少。性的な意味で父親の愛娘。

[ピンクラビア]

バイセクシュアル。自ら望んで入厩した。

[プッシーダンサー]

親族の総意で強制入厩させられた。

父の遺産相続権を放棄しない限り出厩できない。

ジャクソン（62）

サトウキビ農園主。ミリオネア数人と共同で牧場を経営している。

レディー：女調教師　　ミスター：調教師

カルロ&ニッコロ：馬丁の親子

## 目次

0 . 起業と性癖と .....	- 7 -
1 . .....	- 12 -
2 . .....	- 29 -
3 .	
4 .	
5 .	
6 .	
後書-	

## Splendid Marvelouse Tour へようこそ！

弊社では貴女様の被虐願望を叶えてさしあげるために、  
**Suspenseful Option System**  
を御用意致しております。

**Non Virtual / Non Fantasy / Non Role-playng**  
最少催行人員は1名様です。

末尾のメールフォームより、できるだけ詳しくご要望をお知らせください。

弊社が貴方様に最適のプランを提案させていただきます。

なお、貴女様の安全は社会的にも肉体的にも守れるよう最大限の努力を致しますが、必ずしもこれを保障するものではありません。

(現在まで、事故例はありません)

弊社にて定期的に催している企画もございます。国内限定で安全性も高く、料金も超格安に設定していますので、まずはこちらをお試しになられては如何かと思います。

1：新年寒中水泳 1月4日（日帰り）

催行人員：1名様～30名様

参加費：交通費のみ（諸経費はお客様負担です）

男性同伴者との参加も可能です。

禪での参加ですが、胸に晒を巻いていただきます。

2：禪海女ショーと夜の鮑売り 夏季随時、日程応相談

催行人員：1名様～3名様

参加費：交通費のみ（諸経費不要）

- ・地元女性の参加者が素潜りを指導します。

- ・鮑売りは自由参加です。

（売上代金の75%を還元致します。）

3：夏季柔道合宿 8月12日～8月17日

催行人員：3名様～8名様

参加費：交通費+3万円（諸経費含む）

- ・練習、宿舎とも男女同室です。

- ・道着は素肌に着用していただきます。

- ・柔道未経験者にも、手取り足取り指導いたします。

4：寒中座禅修行 12月10日～12月16日

催行人員：2名様～5名様

参加費：交通費のみ（諸経費不要）

- ・修行は女性のみですが、一般男性が補助します。

- ・警策は肩だけを叩くとは限りません。

- ・座禅転がしは拒否できません。

その他、各種企画を検討中です。

国外でのイベントも新たに立ち上げました。  
国内に比べてリスクが高くなります。

A：女囚性務所 不定期

催行人員：1名様～3名様

参加費：一般ツアー費用に準じます

- ・実際に女囚（前科にはなりません）として2週間程度のVIPへの性的奉仕に従事します。
- ・看守たちの女囚への虐待は日常化しています。
- ・日常生活および性生活に支障が無い程度の半永久的な肉体への損傷を受ける場合があります。
- ・当国内外の長期服役囚もいますので、言動には気をつけてください。

その他、ポニーガール、裸族性人儀式、男女格闘技戦などを検討・現地調査中です。

SMツアー有限公司

## 0. 起業と性癖と

高山昭雄が大手の旅行会社を辞めて独立したのは、二年半前だった。有限会社の形をとってはいるが、実際には個人経営であり、元の会社の下請け業務が主な収入源だった。格安をうたい文句にするツアーの下請けだから、利益はゼロに等しい。二十年も業界にいて内情を知りつくしながら、それでも割に合わない起業に踏み切ったのは、彼の一種倒錯したフェミニズムによるところが大きい。

高山は若い頃、ツアーコンダクターをつとめていた時期があった。旅の恥は掻き捨てだが、インターネットがそれほど普及していなかった当時、ツアー参加者は恥の捨て場所を知らない。とうぜん、高山は夜も観光案内にいそしむことになる。ナイトクラブや公認の売春館ですめばまだしも。東南アジアや東欧へのツアーともなると、●●買春の斡旋まで

させられた。不法な要求を毅然と断わるどころか、共同正犯になったのだから——彼の倫理観や遵法意識も底は見えている。

その手の観光客には好評だった彼にも、苦手な相手がいた。ごく一部のマニアックな女性である。娼婦の真似事がしたい、SM館で本格プレイをしてみたい。それくらいならツテはある。しかし。

「麻薬所持で逮捕されても、肉体の賄賂で釈放されるってほんと？」

「ポニーガールの牧場が、この近くにあるとネットで見たのですけれど？」

「淫らな女は公開鞭打ちで罰せられるんですよ？」

「女子割礼って、成人女性でも受けられるのですか？」

合意、あるいはフィクショナルな関係におけるマゾプレイではなく、現実世界での被虐を体験したいという女性たちだった。実際にハードなSMプレイをしている女性もいたし、



妄想逞しい処女もいた。後者は自分の妄想が現実となったとき、おそらくその場では後悔するだろう。しかし、日が経つにつれて、当時を思い出しながらオナニーに耽るのではないか。高山は、そう考えた。

現実世界での被虐を安全に体験させるには、相応の事前準備が必要だった。ポニー牧場を例にとれば、まずオーナーとの信頼関係を築かなければならない。撮影の諾否についても、参加者と牧場側とで取り決めておく必要がある。高山が話をつけた牧場は裕福なサディストたちの共同経営だったが、ポルノの販売や男性訪問者からの高額な〈寄付〉で運営費の過半をまかなっていた。

事前準備の手間は一般ツアーとの比ではない。現地スタッフに丸投げもできないし、官憲に賄賂が必要な場合もある。赤字すれすれの弱小旅行社が手がけられる仕事ではなかった。それでも高山が専属の裏社員を雇ってまで『スプレండిッド・マーベラス・ツアー

有限会社』を起こしたのは、特殊な願望を秘めた女性への奉仕であると同時に……ツアーコンダクターからの詳細な（たいていは写真が添付された）報告書、自分ひとりではとても体験しきれない数々のシチュエーションを堪能するためだった。

三つの国内企画を裏ページで公表したのが、一年半前。五回の催行で参加者は延べ十七人。たったこれだけの需要のために二人の専属スタッフを抱えているのだから、大赤字もいいところ。

とはいえ、あまり大っぴらに宣伝もできない。それどころか。表ページの隅っこに成人女性限定のアンケートを設置して、プライバシーに係わる質問も含め百以上の項目に答えさせ、その結果をA Iに分析させて、合格者だけ裏ページに辿り着けるようにしてあるくらいだ。

高山はS O Sを維持するために、父が遺してくれた貸しビルの収益をすべて注ぎ込んで

いる。つまりは道楽、それともおのれの性癖を満たす代償行為なのだった。

## 1. 覚悟の入厩

延々と続くトウモロコシ畑を割って一直線に伸びるハイウェイ。高山はアクセルに軽く足を乗せてオートクルーズで走りながら、満足と焦燥とを同時に感じていた。

今回の S O S (Suspenseful Option System) は、特定の顧客のために企画した最初のツアーだ。結果が悪くなければ、不定期に催行する企画に採用するつもりだ。そういう意味では、きわめて順調だった。

今は社長（というほど大袈裟な会社ではないが）みずから、一頭の牝馬を人間牧場へ輸送中。輸送後は東部へ行って、男女異種格闘技戦というよりは、リョナファイトの下調べをする予定だった。

企画は増えていくというのに、裏添乗員は村上詩織と西川麻凜の二人だけ。しかも詩織は、アジア某国の女子性務所で服役中。人手

が足りない。

裏ページでもそれとなく募集はしているから、月に一人くらいは裏添乗員への応募者もいた。しかし、高山の目で見て素質のある女性はいなかった。

物思いに耽りながらも、高山は清涼飲料の小さな看板を見逃すことなく減速して、ハイウェイをそれて細い道にハンドルを切った。さらに三十分。車は広大な休耕地を走って、柵で囲まれた一画にたどり着いた。柵の中には数棟のプレハブ建築と牽引式の大きな水タンク、それに五台のトレーラーハウス。恒久的な建築物は見当たらない。

柵の手前で車を止めた。高山が車から降りると、十秒ほども間をおいて木島菜穂子が助手席側のドアから降り立った。

柵の内側は手入れの行き届いていない芝生になっていて、中央だけが楕円形に地肌を剥き出していた。そこで行なわれている調教風景を、菜穂子は食い入るような目で見つめた。

しかし、驚きの表情はなかった。四人の若い女性がコルセットのような胴着だけを身に着けて、乳房も下半身も露出したまま、足並みをそろえて行進しているというのに。

高山は芝居っ気たっぷりに菜穂子の二の腕をつかんで、柵の出入口まで連れて行った。いちばん小さなプレハブ小屋から肥った男が姿を現わした。洗いざらしのオーバーオールとTシャツ。質素な農夫に見えるが、この男が牧場主で、広大なトウモロコシ畑の持ち主でもあった。

「菜穂子さん。ここで裸になってください」

高島のとんでもない要求を、菜穂子は当然のように受け入れた。ブラウス、ブラジャー、ショートパンツを脱ぎ、スニーカーも脱いで素足になった。さすがにショーツを脱ぐ手つきにはためらいがうかがえたが――全裸になると、どこも隠そうとはせず、両手を身体の脇に垂らした。

七月の乾いた風が、菜穂子の火照った肌を

駟る。

菜穂子は昨夜のうちに除毛フォームで首から下は産毛すら一本も無い肌にしていたので、色素の沈着した亀裂までが二人の男の目に晒された。いや、三人だった。ビデオカメラを構えた男が菜穂子の裸身にレンズを向けている。

牧場主が菜穂子のまわりをぐるりと巡って、尻の張り具合をたしかめるようにぴしゃぴしゃと叩き、重さを量るように乳房を持ち上げた。歯並びでも見るのか、顎をつかんで口も開けさせた。

菜穂子は黙って、されるがままになっている。

「この牝はポニーの資格がない。歳を食いすぎているし、馬体に締りがいい」

TOEIC七百八十点の菜穂子は訛りのきつい牧場主の英語を理解して、唇を噛んだ。

そんなことは自覚している。すでに三十八歳。百六十三センチなのに六十二キロ。アン

ダーバストとウエストが同じ数字で、ヒップは大きい。

「預かるなら使役馬、いや、荷物運びのロボとして扱うことになる」

それこそ菜穂子が夢想していた境遇、あらかじめ高山と牧場主とで取り決めていた待遇なのだが、他人に言われると屈辱に感じる。そしてその屈辱が、菜穂子の股間を熱くさせた。

「それで結構です。では、一か月の預託料として千五百ドルを収めてください」

高山が封筒を牧場主に手渡した。つまり、菜穂子はSMクラブの客のような立場にある。いや、客は高山で――菜穂子は専門家に調教を依頼された牝馬だった。菜穂子には調教の中断を求める権利はない。プレイ中に〈お慈悲を願います〉と言うと手加減、〈お赦してください〉で責めを中止するといった合言葉の類もない。しかも一日五十ドルの預託料は、素顔を晒したポルノ撮影に同意したうえでの金



額だった。

「すぐに調教を始めるが、見学していくかね？」

「シュア」

高山は即答した。そして、菜穂子の脱ぎ捨てた衣類を拾ってカメラの視界から遠ざかった。パスポートも高山が預かっている。絶対に逃げ出せない状況——それも、菜穂子が希望したことだった。

牧場主は短い乗馬鞭で菜穂子の尻を叩いて、大きな扉のある倉庫のような建物の前まで追い立てた。

「カルロ、ニッコロ。新しい仕事だ」

建物から二人の男が出てきた。

「こいつらは馬丁だ。おまえの調教と使役を担当させる」

カルロは六十絡みの痩せた男、そばかすだらけのニッコロは二十代半ばといったところだった。顔つきが似ているから、父子かもしれない。

「おまえにも名前が必要だな。ドンキーア  
スがいい」

ロバの肛門。屈辱的な名前だが、それがこ  
の牧場主の趣味だった。

「こいつに荷役用のフルハーネスを着けてや  
れ。荷馬車は重量物運搬用の二穴牽引だ」

ニッコロが隣の小屋から、リヤカーほどの  
大きさの荷車を引いてきた。ふつうのリヤカー  
にはコの字形のハンドルがついているが、  
これは一本の棒で牽引するようになっていた。  
リヤカーの下から伸びた引き棒が途中で鎌首  
をもたげて、腰の高さでまた水平に伸びてい  
る。その水平な部分に、短い間隔で大小二本  
の鉄棒が屹立していた。前側の鉄棒は、直径  
が五センチを超えていた。後ろも四センチに  
ちかい。

カルロが荷台から大小の鉄枷を取り出した。

「じっとしてろよ」

大きな鉄枷を菜穂子の首に嵌めてボルトで  
締めつけた。手を後ろにまわさせて、鎖でつ

ながれた手枷を嵌める。手枷の鎖が首枷につながれて、菜穂子の手首は腰の上まで引き上げられた。

（七年ぶり……かしら？）

二十三歳から二十八歳までの五年間、菜穂子は特定のご主人様にマゾ牝として調教されていた。その後もしばらくは出会い系などで知り合った相手とプレイをしていたが、ウエストがアンダーバストに近づくにつれて消極的になっていった。独り遊びは別として、七年ぶりに味わう拘束の苦しさだった。いや、これまでは縄がほとんどだったから、鉄枷の重みを肌で知ったのは、これが初めてということになる。

菜穂子がつぎに装着されたのは乳枷だった。これも生まれて初めての体験だった。

湾曲した二本の鉄棒で乳房の上下を挟み、両端と乳房の谷間にある三本のネジを締めつけながら、カルロが乳房を引っ張って鉄棒を食い込ませていく。乳房の基底部分がぺちゃん

こにつぶれて、そのぶん膨らみが強調される。

「くうう……」

この牧場へ来て初めて、菜穂子が声を漏らした。

カルロは、完全に乳房をつぶしきる手前でネジを止めた。乳房の谷間のネジに細い鎖をつなぎ、引っ張り上げて首枷につないだ。

「みごとなバストアップですね。ドンキーアッスも悦んでいるでしょう」

高山がカメラマンの横に近づいて感想を述べた。

菜穂子はさらに革のコルセットでウエストを絞られた。呼吸も満足にできないほどだったが、地面に落ちた影にくびれがあるのを見て、嬉しいような悲しいような複雑な気分になった。

最後に馬銜を噛まされた。肩甲骨の高さでそろえていた髪をツインテールに結われて露出した首の後ろに細い革ベルトを巻かれ、V字形をした硬質ゴムを舌の奥まで突っ込まれ

た。歯の当たる部分が太くなっているので、子音はもちろん母音すらも満足に発音できない。

ハーネスのつぎは、蹄鉄の替わりだろう平べったいサンダル底のようなゴムを、瞬間接着剤で足の裏に貼り付けられた。馬場で調教されている四人の娘たちはヒールの高い紐サンダルを履いているから、それよりは歩きやすそうだが、責め具として見栄えがしないのが、菜穂子には不満だった。

そうして、いよいよ荷車につながる。

ニッコロは荷車の前に菜穂子を立たせて、引き棒を跨がせた。

「あ……」

いきなり股間に手を差し込まれて菜穂子は身をよじったが、すぐ正面に向きなおって背筋を伸ばした。カルロが前から菜穂子の肉壺を騷り、ニッコロは背後から枷で絞り出された乳房を揉みしだく。乱暴だがねちっこい愛撫で、菜穂子は蜜をしとどに絞り出された。

その蜜が、引き棒に溶接された二本のディルドに何度も塗りたくられた。カメラマンは、その様子もクローズアップで写している。

引き棒が持ち上げられるとディルドが股間の花卉に埋没し、尻の谷間に隠れた菊座を抉る。平行に屹立しているディルドは、膣と直腸の角度とは合っていない。それを強引に押し込まれた。

「んん、んんんっ……」

下腹部をえぐられる鈍痛に菜穂子は呻いた。しかし挿入が終わると、著しい膨満感が残ったが痛みはおさまった。

鉄棒の先端は環になっていて、短い鎖で乳枷の下につながれた。

カメラマンが二十メートルほど前へ出て片手を上げた。

「ゴーアヘッ！」

ぴしっと追い鞭で尻を叩かれて、菜穂子は足を前へ踏み出した。とたんに、下腹部を重い痛みが襲った。反射的に腰をかがめると、

尻を強く鞭打たれた。

「ゴアヘッ。まだ荷物を積んじやいないぞ。  
怠けるな」

「んんん、んんーん！」

下腹部の痛みをこらえながら思いきり括約筋を締めて、菜穂子は歩き始めた。

地肌が剥き出しの馬場と違って手入れの行き届いていない芝生なので行き足がつかず、苦痛も軽くなならない。痛みを引きずりながら、菜穂子はカメラマンの前を通り過ぎ、そのまま馬場の外側を一周させられた。距離にして五百メートルはあっただろう。

もし荷物を積まれたらとても耐えられないだろうと、早くも脂汗を浮かべながら菜穂子は戦慄した。

「よーし、止まれ」

元の大きな建物まで戻ると、菜穂子はへたり込んだ。しかし、膝をつく前に引き棒の下辺が地面につっかえて、菜穂子は股間で体重を支える結果となった。

荷車の枠から鎖が伸ばされて、背後から乳枷の両端につながれた。

菜穂子は、ほうっと安堵の息を吐いた。これなら――身体を前へ倒せば、胸で荷車を曳ける。

カルロとニッコロが荷車に乗り込んだ。

「よーし。受け渡し小屋まで往復だ」

長い追い鞭で腰を打たれて、菜穂子は前傾姿勢になって足を踏み出した。

「んんんっ、んん、んんんーっ！」

胸で曳くといっても、下半身への負荷もじゅうぶんに残っている。コルセットで腹を締めつけられているうえに胸まで圧迫されて、息もますます苦しい。

ぐいと乳枷が左に引かれた。意味は明白だ。菜穂子は左へ蟹歩きしながら荷車の向きを変えようとした。それまでとは異なる角度からの痛みが、下腹部を苛む。。

柵の外へ出て、車で来た方角とは反対に向かって進んだ。舗装されていないでこぼこ道



は、芝生よりずっと曳きづらかった。車輪がゴトンゴトンと窪みを乗り越えるたびに、二本のディルドが股間を突き上げる。それは圧倒的に苦痛の割合が大きかったが、性的な刺激も菜穂子に与えた。

カメラマンが忙しく動きまわって、菜穂子の苦闘を存分に撮影する。

「ゴーアヘッ。もっと速く」

両肩を追い鞭で叩かれた。乳枷がぐいと後ろに引かれて上体が起きた。そのぶん、胸で強く曳けるようになったけれど――足を前へ踏み出すときは腰からの動きになるので、下半身への圧迫は減らなかった。

「んんっ、んんっ、んんっ……！」

一歩ごとに呻きながら、菜穂子は二人の男が乗る荷車を曳いた。

わずかの休息も与えられず四十分ほども荷車を曳きつづけて、日除けの屋根だけが掛けられた資材置き場のような場所に着いた。菜穂子の全身は汗にまみれ、股間から太腿にか

けては性器への刺激で絞り出された蜜がべったり垂れていた。

「朝はここから荷物を運ぶ。夕方には空容器やゴミを持ってくる。俺たち二人分より、ずっと重いぞ」

ニッコロが薄汚れたタオルで菜穂子の身体をわざと乱暴に拭く。髪をつかんで顔をあおむかせ、ペットボトルの水を口に流し込んだ。

「んん、んほっ……」

馬衝に舌を押さえられているので、菜穂子はうまく呑み込めずにむせた。それでも、渴ききった喉には生暖かい水が甘露な清涼飲料のように感じられた。

二人の馬丁は、それ以上に荷役ロバをいたわることなく、また荷車に乗り込んだ。

「ゴーアヘッ」

乳枷を右に引かれて菜穂子はその場で荷車の向きを百八十度変えると、尻を左右同時に叩かれて、人間牧場への道を引き返して行った。

荷車を曳くコツがすこしはわかってきたので、九割の苦痛と一割の快感とに苛まれながらも、菜穂子は二人の馬丁がかわす言葉に聞き耳を立てる余裕もできた。

二人は、やはり父子だった。イタリア系移民の子孫で、祖父の代からずっと雇われ農民だった。牧場主に命じられたのと興味本位とで馬丁になってみたが、STD予防のためにセックスまで管理されていて、とくに息子のほうは欲求不満をつのらせている。

そこへドンキーアスの世話を言いつかつたのだから、菜穂子にとっては不運なのか幸運なのか。牧場に着くのも待ちきれず、菜穂子の三つの穴をどの順番で責めるか、父子は荷車の上で相談を始める始末だった。

――牧場に着いたとき、高山の車はすでになかった。

みずから強く望んでのこととはいえ、取り返しのつかない選択をしてしまった。これからの三十日間、自分はポニーガールよりも格

下の荷役ロバとして調教され酷使されるのだと……菜穂子は不安にかられながらも妖しく胸ときめかせ股間を熱くするのだった。

## 2. 四頭の牝馬

「すぐに身体を洗ってやりたいところだが、お嬢ちゃんたちとかち合っちゃったな」

菜穂子は荷車から解放されると、ハーネスを着けたまま、五メートル四方ほどの分厚いゴムシートが敷かれている脇の樹に首枷の鎖をつながれた。

ゴムシートの上では、調教を終えた四頭の牝馬が二人の調教師に馬体を洗われていた。調教師は中年のスキンヘッドと、菜穂子と同じ年くらいの女性。菜穂子と違って、どの牝馬よりも背が高くグラマラスだった。

二人とも上半身裸になって、スポンジで優しく馬体を愛撫している。

「プッシーの際までタトゥを刺れてるのがいるだろう？」

ニッコロが菜穂子の汗を拭いている横でカルロが、片膝を馬繫柵に乗せてこちらを向い

ている裸身を指さした。両肘も背中にまわしたハーネスで拘束されていた。無毛の下腹部に赤と青で天使の羽のようなタトゥーをしている。

「あいつが一番のベテランで、アナルステップ。馬主が南米へビジネスに行っているあいだ、うちで預かっている。牧場主のお気に入りだから、機嫌を損ねるんじゃないぞ」

冬季は閉鎖する牧場が再開されると同時に入厩して、すでに四か月。二十五歳だが、群れのボスみたいな存在だった。

カルロは、他の三頭の名前と境遇も教えてくれた。

すこし太めの三十絡みがバレンプッシー。夫が不妊症で、入厩は繁殖が目的。彼女にかぎっては、避妊処置がとられていない。

現役のモデルかと思わせるスレンダーだがメリハリのあるボディはピンクラビア。馬主はおらず、この牧場がこっそりと（検索ロボットにも発見されないようにして）開設して

いるホームページを探し当てた。預託料無しだが〈普通の〉ポルノ製作会社への動画転売とネットでの顔出しOKで四か月の契約の半分が過ぎたところ。

そして、ただひとりの●●●。●三歳のプアブーブス。貧乳という意味だが、Bカップは確実にありそうだった。しかし、アジア系とのハーフだからなのか、白人に比べると年齢よりも幼く見える顔つきだった。長い髪を頭の上で丸く結っているのも、精一杯おとなっぽく見せようとしている印象を受ける。

彼女は二年前から父親と関係を持っているが、人見知りが激しく、父親が他の男を（金銭づくで）紹介しても拒むのだという。その性格を矯正すると同時に一人前のマゾ娼婦に仕立てるために、父親が一か月前に預託したという。期限は八月末だから、出厩（卒厩？）は菜穂子の二週間後になる。

他の三人と違って深刻な性的虐待を受けているプアブーブスに同情しながらも、菜穂子

は空虚になった二穴が熱く疼くのをおさえられなかった。

調教師はバレンプッシーとピンクラビアも、アナルステップと同じように二の腕を拘束して馬繫柵を跨がせ、最後に二人がかりでプアブーブスを（さんざんに刺激して嬌声を引き出してから）洗い終わると、菜穂子が倉庫かと思っていた厩舎に四頭を追い込んだ。

菜穂子が洗い場に引き出された。すべてのハーネスをはずされると、マットの上でブリッジの姿勢になるよう命じられた。

父子の意図を察して、菜穂子は妖しい期待に胸を締めつけられながら、手足を踏ん張って身体を反らした。

「そのまま立っている。倒れたら鉄のペニスに、このコンドームを着けるぞ」

上下逆転した菜穂子の視野に、太い鉄パイプがかざされた。表面には六十度くらいに尖った鋸がびっしり植わっていた。鉄のディルドにこれをかぶせられたら――膣や直腸がず



たずたに切り裂かれたりはしないだろうが、苦痛は倍加どころか一桁は上がるだろう。

ぶしゃああっ……予期していたとおおり、股間に激しい水流が叩きつけられた。それはシャワーオナニーの水圧を上げすぎたときの痛みと同質で、被虐の快感もじゅうぶんにあっただのだが。

「あう……痛い」

柄のついた硬いブラシで擦られて、さすがに菜穂子も苦痛を訴えた。訴えたからといって手加減はしてもらえない。乳房を挿り潰すように擦られ、腹の上をブラシが往復した。

「ぶふっ……！」

顔に水流を当てられ、鼻に水が逆流して菜穂子はむせた。顔をそむけてバランスを崩すのを恐れた菜穂子は、息を止めて鼻の奥の痛みを耐えた。

顔面への放水は、せいぜい十秒で終わった。父子は菜穂子を立たせると、革のコルセットもたっぷり水で濡らしてから、胴を締めつけ

た。乳枷も濡れた裸身に装着した。肌が滑りやすくなっているぶん、簡単に根元まで食い込んだ。今度は乳房が紫色に変色するまでネジを締めつけてから、首枷に鎖でつないだ。手首は左右に分けて、革紐で乳枷の端に縛りつけた。腕を動かせば、菜穂子は自分で乳房をこねることになる。

最後に肌を、他のポニーに使われて湿っているタオルで拭かれてから、菜穂子は厩舎へ追い込まれた。

四人の娘たちが、はっきりと好奇心の眼差しで菜穂子を見た。

「こいつはドンキーアッスだ。おめえたちの仲間ではなくて、ただの荷役ロバだ」

好奇心に答えを与えてから、カルロは菜穂子をいちばん奥の馬房へ連れて行った。

菜穂子は、四人が立っているのではなく立たされていることに気づいた。馬房の奥から柵まで細長い板が端面を上にして渡されている。それを跨いで股間に食い込ませているの

だった。左右の足首を、板の下をくぐった長い鎖で連結されているから、板に沿って前後には動けても、板から降りることはできない。

（ここまでリアルにするの？）

ポニーガールの写真や動画は無数に見てきた。藁に裸身を横たえる構図も記憶にある。けれどそれは、単なる牝奴隷の就寝風景と変わりない。

馬は寝る時も立ったままだ。人間をずっと立たせておくには、これがもっとも手軽で嗜虐的な方法だろうと、菜穂子は感心してしまった。奥のほうには幅三十センチほどの板が斜めに取り付けられているから、ここに背中をあずければ安眠かどうかはともかく、眠ることも可能だ。

しかも、この板には娯楽（？）の手段までそなえられていた。板の手前のほうには手ごろなサイズの木製ディルドが屹立している。足元には踏み台も置かれていた。どの娘もこれを愛用しているらしく、磨き込まれた光沢

を帯びていた。

菜穂子も同じ仕掛けのある馬房へ入れられた。板は高さを調節できるようになっているのだが、カルロはわざと、菜穂子が爪先立ちをしても股間をさらに押し上げる高さで固定してしまった。

「もうすぐ昼飯だ。午後からは、たっぷりかわいがってやるぞ」

ぱんぱんに膨れあがった乳房の頂点で尖っている乳首を指で引き伸ばして菜穂子に軽い悲鳴をあげさせてから、父子は馬房を出て行った。

「あたいはピンクラビアっていうんだけどさ——あの荷車が使われるのを初めて見たわ」

菜穂子の馬房と四人との間には空室が三つあるから声の主は見えないが、ピンクラビアは右肩にタトゥではなく小さな和彫をいれたモデル体型の娘だ。

「あなたのオーナーは相当なサディストね」

「違います。わたしをここへ連れてきた男は、

ええと——エージェントという表現で合っているかしら。わたし自身が牝馬としてサディスティックに扱われることを希望したけれど、あなたと違ってひとりでは何もできなかったの、エージェントにここを紹介してもらったのです」

「ふうん……あの親子は、そろっておしゃべりだね」

「言っとくけど……」

子供っぽい声が甲高く響いた。ピンクラビアの向かい側の馬房からだった。奥に引っ込んでいるので姿は見えない。

「あたし、ちっともかわいそうなんかじゃないからね。パパと離れてると、あたしがどんなにパパを愛してたかがわかって、さみしいけど……ちょっとつらいけど、でも幸せな気分になれるんだから」

幼い娘の強がりだろうけれど、けっして嘘ではないと共感できるくらいの恋愛経験は菜穂子にもある。

アナルステップとバレンプッシーとも挨拶を交わして。

女五人が姦しくなる前にニコロ父子が戻ってきて、浅い桶を柵に吊るしてまわった。

菜穂子から見える斜め向かいの馬房に、ピンクラビアとアナルステップが姿を見せた。背の低い踏み台に乗って、ディルドを跨いだ。腰を沈めて挿入したディルドに支えられるようにして上体を倒し、桶に顔を突っ込んだ。二の腕は体側で拘束されているが、その先は自由なので、桶の底に手を添えて傾けている。

菜穂子も二人の真似をしようとしたが、板がぎりぎりまで上げられているので、ディルドを跨げない。鎖が許すかぎり片脚を上げ、腰をあれこれひねって、ようやく股間に収めた。桶に顔を近づけると、中には薄茶色のおが屑のような物がいっていた。見た目とは裏腹に、食欲をそそる香ばしい匂いがした。

他の四人と違って手首を乳枷に固定されているので、桶に顔を突っ込むと鼻まで埋まっ

てしまった。

(え……おから?)

ソース味だったが、食感は和食のおからそっくりだった。豆乳を凝固させて砕いたものに野菜屑や肉片を混ぜてあるらしい。栄養バランスだけはしっかりした、それはまさしく〈餌〉だった。

そんなに不味くもなかった。ひとくち食べたたん、菜穂子は疲労よりも乳房の圧迫痛よりも股間の鈍痛よりも激しい空腹感に襲われた。〈餌〉をすこし食べると、今度は喉の渴きを覚えた。飼葉桶の斜め上にペットボトルが逆さに吊ってある。身体を起こして、下向きの太いストローを強く吸うと、スポーツドリンクらしい液体が喉をうるおした。

(こうやって……これから三十日間、わたしはここで荷役ロボとして飼われるんだ)

菜穂子は、しみじみと被虐を噛み締めたのだが。

「早く食べなさい。餌の時間は十五分だけよ」

アナルステップの声で、食欲優先に切り替わった。

彼女の言葉どおり、きっかり十五分後にニコロ父子が飼葉桶を回収に来た。飼葉桶だけでなく、菜穂子も馬房から引き出した。

片膝を馬繫柵に乗せた立ち姿で菜穂子を待たせておいて、手早く飼葉桶を洗って天日に干す。それから、住居にしている小さなトレーラーハウスに菜穂子を引き込んだ。そこにはカメラマンも待ちかまえていた。

「これから一時間ばかり、おめえを人間として扱ってやるよ」

菜穂子は両手の拘束を解かれ、乳枷もはずしてもらった。けれど、まだ半濁きのコルセットはそのままだった。

「ウエストの無い女なんか抱きたくねえからな」

人間として扱うとは、つまりそういうことなのだ。



菜穂子は簡素なベッドの上で、まず父親のニッコロに抱かれた。キスも愛撫もない、いきなりの性器結合だったが、そのレイプ同然の行為に菜穂子の被虐心が刺激された。性急なピストン運動のせいもあって、数分でニッコロが果てる頃には、リズムカルで卑猥な音が狭い室内に響いていた。

その一切が撮影されているのだが、ニッコロは気にするふうもなかった。そして菜穂子は――こんな恥ずかしい姿を何十人もの見知らぬ人々に見られるのだと思うと、頭の芯が痺れた。

ポニーガールの調教風景は、基本的には一頭につき一作の長編に編集される。モザイクや目線はないが、厳重なコピープロテクトが掛けられているので、ネット上で拡散する恐れはない。そして、この牧場で発売している動画は、本物を求める真正のマニアにだけ頒布するというポリシーをつらぬいて、ふつうのエロ動画なら数十本も買える値段がつけら

れている。当然かもしれないが、売上本数は三桁に届かない。だから菜穂子は安心してた。

もし万一、菜穂子を知っている人間が動画を見たとしても、あまりに特殊な趣味であるだけに、口にした本人が自分の恥部を曝すことにもなる。むしろ、脅迫の形をとって新しいご主人様になってくれるかもしれない。

そんな被虐の第二幕を夢想するうちにも、ニッコロが果てた。身体を起こしてティッシュでペニスを拭う横で、カルロがコンドームを装着している。

(……?)

菜穂子はもちろんピルで避妊している。この牧場のスタッフは牧場主も含めて、STDの予防には万全の注意を払っている。それなのにコンドームを使う理由は――すぐにわかった。

股間を拭く暇も与えられず床で四つん這いになった菜穂子に、背後からカルロがのしか

かった。

「すまん。またドンキーアッスに戻ってもらうぜ」

股間の蜜がカルロの指で掬い取られて、肛門にたっぷり塗られた。

生暖かいが鉄のディルドさながらの硬い感触がアヌスを体内に押し込む。これまでに菜穂子が経験したことのない、乱暴なやり方だった。

「い、痛い……もっと優しく……もっとほぐしてから……ひぎいっ！」

極限まで押し込まれたアヌスが不意にめりっと裂けたような激痛。括約筋が跳ね返って、ペニスを一気に根元まで咥え込む感触。

「はあ……はあ……」

ようやく菜穂子はアナルセックスのコツを思い出し、口を大きく開けてゆっくりと腹式呼吸を試みたのだが、それもコルセットに締めつけられて苦しかった。

カルロは菜穂子の腰を両手で抱えて、ぐい

ぐいと引き寄せながら腰を打ちつけ始めた。

「ひぐっ、ひぐっ……」

腸の奥深くまでペニスを打ち込まれるたびに、菜穂子の口からしゃっくりのような声が押し出される。

息子のほうが父親よりもタフで、菜穂子は十分以上も揺すぶられ続けた。括約筋の締めはアヌスのほうが強いが、膣のように全体が収縮しないから長持ちしたのかもしれない。

灼けるような痛みで疼く肛門に、菜穂子はおそろおそろ指を這わせた。直腸から掻き出された汚物と精液と、それに透明の小さなゼリー状の塊が指についたが、血の色はなかった。裂けたと感じたのは錯覚だったと知って、菜穂子はほっとした。

髪の毛をつかんで頭を引き起こされ、目の前にニコロの復活した剛直が突きつけられた。初老の男とは思えないスタミナだった。

菜穂子は口を半開きにして、前歯を唇の内側で包みながらペニスを口に含んだ。最初の

ご主人様から、菜穂子は徹底的にフェラテクを仕込まれている。ウエストにくびれが残っていた頃には、外資系企業の総合職なんか棒に振って風俗嬢に転身しようかと本気で考えたくらい、テクニックには自信があった。踏み切れなかったのは、当時から容姿に引け目があったからだが――それはともかく。

自慢のテクニックを披露するまでもなかった。ニッコロは菜穂子が脳震盪を起こしかけたくらい激しく顔を揺すぶって、喉の奥までペニス突き立て、またも数分で放出してしまった。

菜穂子はマゾ女の当然の作法として、それを飲みくだった。

「身体を洗って来い。また可愛がってやる」

使われた部位は違っても立て続けの三発。それと午前中の調教とで、菜穂子はへとへとになっていた。身体をふらつかせながら洗い場へ行って水を浴びた。タンクから引かれた水は真夏の直射日光で生温かくなっていた

が、菜穂子の火照った肌には冷たく気持ちよかった。革のコルセットが水を吸って伸びたので、息もすこし楽になった。

籠に突っ込まれているタオルは、誰の身体を拭いたものかわからない。誰にせよ、股間も拭っている。そんなタオルで自分の身体を拭くのさえ、菜穂子の被虐心をくすぐった。

トレーラーハウスへ戻って。今度は三十分ほども二人がかりで全身を揉み苦茶に愛撫され何度も逝かされてから、二穴を父子で同時に犯されてとどめを刺された。カメラマンは黒子に徹しているらしく、菜穂子にまったく食指を動かさなかった。

午後三時になると、菜穂子を含めて全員が外へ引き出された。

四頭のポニーたちは調教師の手で、装飾の施された革製のハーネスを装着されていく。半円形にくり抜いた縁で乳房を持ち上げるコルセット、コルセットにつながれた革ベルト

が無毛の股間を割って、ペニスの形をした尻尾の付け根がアヌスに埋め込まれる。よく見ると革ベルトには細長い切れ目があけられていて、そこでクリトリスを挟んでいる。

小さな鈴を吊るした金属製のキャップが乳首を飾る。コルセットの両脇に肘を固定されて、手首に革枷が嵌められる。

赤青黒白とシートの色が違う軽快な二輪車に四頭が、それぞれにつながれた。菜穂子の荷馬車みたいな嗜虐に満ちたつなぎ方ではなく、握り棒と手枷とが短い鎖で結ばれただけだった。握り棒の先は左右がU字形につながっているから、ここに腹を当てれば一人乗りの馬車は、●三歳の少女でも楽々と曳けそうだった。

菜穂子はふたたび乳枷を着けさせられた。長時間装着させておくつもりらしく、乳房が変色するほどには締めつけられなかった。牧場主が言ったフルハーネスを身に着けて、二本のディルドで無骨な荷車につながれた。

「おめえの出番は午後四時からだ。それまではお嬢ちゃんたちの調教を見学してな」

首枷の鎖で、馬場を囲む柵に菜穂子をつなぎ留めると、父子はどこかへ行ってしまった。

――四頭が二輪車を曳いて馬場にならんだ。アナルステップの赤い二輪車にはスキンヘッドの調教師が、ピンクラビアの青い二輪車にはスレンダーな女性の調教師が乗っている。

「ゴーアヘッ」

二人の調教師の追い鞭が、ピシッと音をそろえる。

まず二頭が横にならんで歩き出して、その後ろにバレンプッシーとプアブーブスの空車が続く。四頭とも膝を臍のあたりまで高く蹴り上げてぐんと前へ踏み込む、華麗だがつらそうな歩き方だった。

馬場を半周したところで、アナルステップとバレンプッシーが直角に向きを変えた。歩調は変えずに歩幅を小さくして、馬場を横切る。トラックを周り続ける二頭は逆に歩幅を



大きくして速度を上げた。

スタート地点で四頭が合流して、アナルステップ、ピンクラビア、バレンプッシー、プアブーブスの順に一列になって周回をつづける。四頭だけだから派手さはないが、もっと数が多ければ、直角に開いたファスナーが噛み合って閉じるような演技になるだろうと、それは菜穂子にも予想できた。

馬場の向こう側に達すると、今度は四頭がいっせいに向きを変えた。馬場を横切りながら互いに接近して一点に集まり、ぶつかることもなく広がっていった。

(ああ、そうか)

牧場には週末ごとに人が集まる聞いている。そのときに披露するショーの練習だろうと、菜穂子は推測した。

「ん……？」

すこし前からひどく息苦しくなっていた。とくにウエストが苦しい。

「あ、おえ……！？」

コルセットの革が乾いてきたのだと気づいた。皮革製品は濡れれば伸びて乾けば縮む。濡れたときにぴっちり締めつけられたコルセットが――外の風と日光に晒されてじゅうぶんに乾いてきたのだ。

助けを呼ぼうにも、馬銜で言葉を封じられている。いや、叫ぶことができたとしても無視されるだろう。わざわざコルセットに水を含ませていたニッコロの姿を、菜穂子は思い出した。

馬場の中央に時計が高く掲げられている。四時まで、あと三十分。ウエストを圧迫される鈍痛と窒息しそうな息苦しさを耐えるしかないのだった。

四時きっかり。菜穂子はバケツの水を浴びせられて生気を取り戻した。革のコルセットが水を吸って、肋骨がへし折られそうな圧迫が、じわっと薄れていった。

「さあ、仕事だぜ」

カルロが菜穂子をプレハブの倉庫へ追いやって、空の容器やプラスチックケースを荷車に積んだ。それから並んでいるトレーラーハウスの裏手へまわって、ごみ容器に使っている蓋付の小さなドラム缶を五つ積み込んだ。カメラマンは来ていない。

乳枷と荷車が鎖でつながれたが、わざと長めにされているので、つんのめりそうになるまで上体を倒しても、鎖はたるんだまま。つまり、膣と肛門の筋肉だけで荷車を曳かされるのだ。

カルロが菜穂子の右後ろに立って、尻に追い鞭をくれた。

「ゴーアヘッ」

どうやら、ゴミと一緒に乗るつもりはないようだった。

菜穂子は括約筋をぎゅっと締めて、左足で地面を蹴った。予想していたよりも少ない苦痛で荷車は動き出した。ソリッドゴムのタイヤと懸架装置のない車軸が、路面の凹凸をそ

のまま菜穂子の股間に伝える。苦痛と快感とを同時に与えられて、菜穂子は被虐の愉悦さえ感じながら資材置き場まで歩きとおした。

荷物を降ろした帰路の荷車にはカルロも乗った。けれど荷車と乳枷とをつなぐ鎖が、菜穂子が背を伸ばしていてもぴんと張るところまで縮めてもらえたので、早足で歩かされても苦にならなかった。同じ責めを延々と続けるのは、サディストのほうにも忍耐が要求される——カルロは、さっさと牧場へ帰りたかったのだろう。

厩舎へ入れられて夕食を与えられて。

アナルステップとプアブーブスだけが、また引き出された。

「ちええ、これで四日つづけて〈お預け〉かあ。いいなあ。ドンキーアッスは昼間にたっぷり可愛がってもらってたし」

ピンクラビアがぼやいた。

——ピンクラビアが羨ましがったのも無理はない。一時間半後に戻ってきたアナルステ

ップの肌は、薄暗い厩舎の中でほんのり光って見えるくらいに艶やかだった。そしてさらに一時間後。プアブーブスは、スキンヘッドの調教師に抱えられて、恍惚とした表情で失神していた。失神したまま、足元の踏み台を取り払われたうえで、強制起立具のディルドに串刺しにされた。

菜穂子は初日の緊張と過酷な労働で疲労困憊していたが、ポニーたちの受けた調教も、見た目よりは厳しいらしい。そこに長時間の性的な刺激が加わって、まだ夜の早いうちに全員が眠りに落ちていった。

